



弘大農学部同窓会会報

第16号

平成7年12月6日 発行
発行 弘前大学農学部同窓会
TEL. 0172-36-2111
振替 盛岡4-564番
印刷 (株) 笹 軽印刷



農学部40周年記念事業を終えて

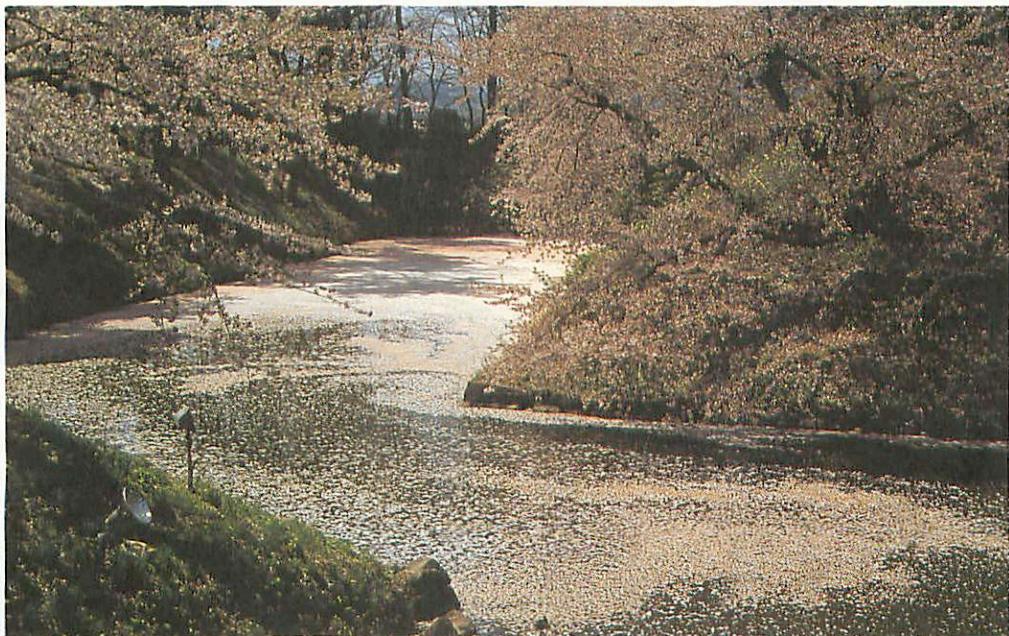
同窓会 会長 中尾 良仁

日に日に紅葉も色を濃くし、農村の各地では収穫の秋を迎え活気に満ちております。

去る10月7日、弘前大学農学部40周年の記念行事が、盛会のうちに無事終了しました。記念式典、記念講演につづいて行われた祝賀会には、来賓、教官、職員および同窓生多数のご参会を得て、40年の月日に思いを寄せながら互いに学生時代の思い出話等に花を咲かせ、旧交を温めることができました。これも

一重に同窓会会員のご協力の賜であり厚く御礼申し上げます。

皆さんとともに30周年をお祝いしたのがつい先日のような気がしますが、この10年間に1,500人の新しい会員を迎える、現在は3,600人を越える大所帯の同窓会になっております。これらの方々の多くが県内外の各方面で活躍されておられる姿に触れ大変心強く感じております。



弘前公園 (写真提供: 奥瀬一郎教授)

現在、大学全般の改革構想の中で、農学部についても学術研究と教育実践の充実に意を用いて検討が進められております。

このことについては、農学部が時の青森県知事津島文治氏を中心に県民各界・各層からの強い要請もあって創設されたという経過に加え、とりわけ、我が国の農業・農村を取り巻く情勢が依然として厳しく、大きな変化に直面している中で、特に青森県においては、農業が県経済と、県民生活を支える重要な産業であるだけに、県内の農業関係者を中心に多くの県民から農学部の今後に大きな期待が寄せられているとともに、その成り行きが注目されております。

同窓会としましても、多くの卒業生が農業関係の職場で活躍されているだけに、その動

向に大きな関心をもっております。

北の農業の時代といわれる中で、研究・教育機関として、また地域の要請に積極的に対応することができる農学部として、今後益々発展されることを期待しております。

バブルの崩壊、円高による日本経済の冷却、オウム事件など大きな社会不安を抱えた状況の中で、40周年に寄せられた同窓の皆さん的心温まる募金に改めてお礼申し上げますとともに、次の50周年に向けて農学部が大きく羽ばたいていくことを念じております。そのためにも同窓生の皆さんこれまで以上のご協力をお願ひいたします。

なお、先日の総会での決定により会長職を引き続きお受けすることになりましたので、これまでと同様のご協力をお願ひいたします。



農学部の研究と地域への貢献

農学部長 菊池 順郎

先日、学長と各学部長を含む大学改革委員会が地元の新聞社の人達と話し合う機会があった。その席である新聞社の人の質問に、「いまリンゴ園の改植が重要な問題になっているが、農学部ではこれに対してどのように取り組んでいるのか」というのがあった。これは大学の研究のあり方について、かなりの誤解があると思ったので、私は「大学の研究と試験場の研究の違いについてどうお考えですか」と質問してみた。これに対しては、他の新聞社の人達を含めて答えが返ってこなかった。

いま農学部の改革をめぐっての論議が重大な段階にさしかかっているが、いつも問題になるのは地域農業との関係である。地元の農業関係者の農学部への期待が大きいことは大変ありがたいことであるが、期待の内容は漠然としたものであることが多い。上記の新聞社の人の質問は、地域の農業関係者の考えのひとつの側面を代表しているのかもしれないと考えさせられた。地域への貢献については

農学部内での改革論議でも問題になるが、とかく抽象論になりがちである。むしろ上記のような素朴な質問にどう答えるかというあたりから考えてみたらどうかと思う。

農学部における研究のあり方については、教官それぞれで考えてやっているし、いろいろな考え方の人が存在できることが大学の大学たるゆえんである。しかし、こと教育に関しては農学部が農学教育を目的とするからには、農業や関連産業、関連分野の諸問題に対してしっかりした考え方を持った学生を送り出すことが大切である。そのためには教官が自分の研究の目的、農学との関係等についてどういう考え方を持っているかが重要であると思う。大学における教育は研究と無関係ではないからである。

私自身は地域における実際的問題を研究テーマとして追求する中で、一般的・普遍的な問題へ発展させ、法則性の発見へつなげたいという考え方でやってきた。地域の問題には

関係なく、学界における重要な研究課題や既往の文献を検討して未解決の問題をみつけて追求するというのが、大学研究者に多くみられる行き方かもしれない。しかし農学の分野では、既存の研究の枠の中に入つてこない未知の問題が山ほどある。それは大都市の農学部の研究者には決してみつけられない金脈のようなもので、それを掘り出すことのできるのは農業地帯の真中にいる我々のみの特権である。そういう研究を通じて、地域の農業に対しても新しい視点に立った助言を行うことが可能になるのではないかと思っている。

最後に農学部改革問題の現状について触れ

ておきたい。一昨年、昨年と「環境学部構想」について報告し、同窓生の皆様から御心配や御批判を頂いた。環境学部構想は、結局文部省の理解が得られず、今春農学部教授会において廃案となった。現在、理学部の理工学部への改組に関連して文部省からの示唆があり、理学部生物学科と合流して新農学部（これは便宜的な仮称）づくりを目指すということで検討中である。生物学科との話し合いが最近始まつたばかりで、改組の方向や見通しを語れる段階になつてないので、今回はこの程度の報告でお許し頂きたいと思う。

思い出すまま

福 重 裕 康

定年退職する前の10年間は、パソコンの前に座ることが多かった。

化学実験台がなければどうにもならなかつた私にこのような転機がおとずれたのは、昭和58年に科学研究費の補助で設備した電気泳動用濃度計とパソコンを連動し、ムギ類子実の SDS複合蛋白質の構成と、酵素のアイソザイムの泳動像の図形解析を始めた頃からパソコンに病みつくようになった。

電気泳動と言えば、昭和49年卒の青山（旧姓土肥）素子さん、53年卒の武藤（旧姓山田）佳子さん達の研究に対する直向きな姿が思い出される。二人は共に修士を終えて、今は家庭の人にならっているが、この時も女性にとっては大変就職の難しい年であった。

またその頃、赤外線による光合成測定装置を用いて、人工光によるイネの葉の同化能力を、農業工学のトヨタ先生の指導で円筒型光合成測定装置を三つ連動して、品種などの光合成能力を比較する研究が始まった。装置は昭和53年卒の鈴木直人君、斎藤進君らの努力によって製作された。その後、教室の学生に代々受け継がれて研究は進んだ。この間、デー

タは記録紙上に残され、その包は年々山積みされて遅く統計処理するためのパソコンを必要としていた。

その当時、パソコンは8800型の時代から9800型へと革命的躍進の時を迎えていた。がしかし、統計処理のソフトは、88型に合わせたメモリー(DM)の少ないものばかりで、新しい98型のものは、稚拙ながら、自分でプログラムを作り、即応しなければならなかつた。そんな時、MS-DOSで表計算できる便利なソフトが市販されていることを知り、マルチプラン(MP)を買い求めた。このソフトを私作のベーシックプロにくらべると数式、関数方式で使い易く、早速データ処理に使用することにしたが、データが多いとメモリーが不足し、データ数は厳しく制限された。その時のバージョン(ver)は1.1であった。

その後、年々改良されて、そのverが2、さらに3.1にバージョンアップし、MP3として広く使用され始めたのは昭和60年頃であろう。その機能はマクロで簡単に計算を自動化することができ、罫線もひけるなど便利さは更に増し、研究には格好のソフトであった。

奥野忠一編応用統計ハンドブックを座右の書として、相関分析、分散分析などをマクロによってプログラム化することに執念を燃やす日々が続いた。就中、植物などの生長解析に応用するためのロジスティック曲線をマクロによってシステム化することが研究上強く望まれ、試行が続いた。丁度その頃、作物の研究室には須藤充君、石本岳之君など、数学に強い学生があり、MP3をPC-98F同-FV同-VXなどのパソコンのドライブ#Aにセットして、#Bには植物の生長曲線の解析プログラム（ファイル名：Log グ 00. MP3）をいれて、プログラム化に論議が交わされ、ようやく卒業も迫った昭和62年に曲線解析のソフトは完成した。

現在、このソフトは、作物の生長、生産性などの解析、また収量予測のシステム化など有効に利用している。

この3月、退官するに当たって、記念にコンピュータを教室の卒業生から頂戴した。その機種は最も新しく、素晴らしい性能のPC-9821Xaである。

使い慣れたマルチプランはver 4.1でその使命をエクセルに譲り、現在これもウインド型になり、マクロもヴィジュアルベイシックに変わった。いま、些か戸惑いながら、PC-9821XaにEXCEL 5をセットして、挑戦中である。

このパソコンを前に、熟々思うことは、ソフトにしろ、パソコンにしろ、その進歩は著しく、その速さには驚くものがある。このことはこの業種に限らず産業科学に共通して言えそうである。その将来はエンドレスに上昇するようにも思われる。がしかし、このことを陰で支えている人間個々の能力、一人の仕事量には頭打ちがあるようだ。

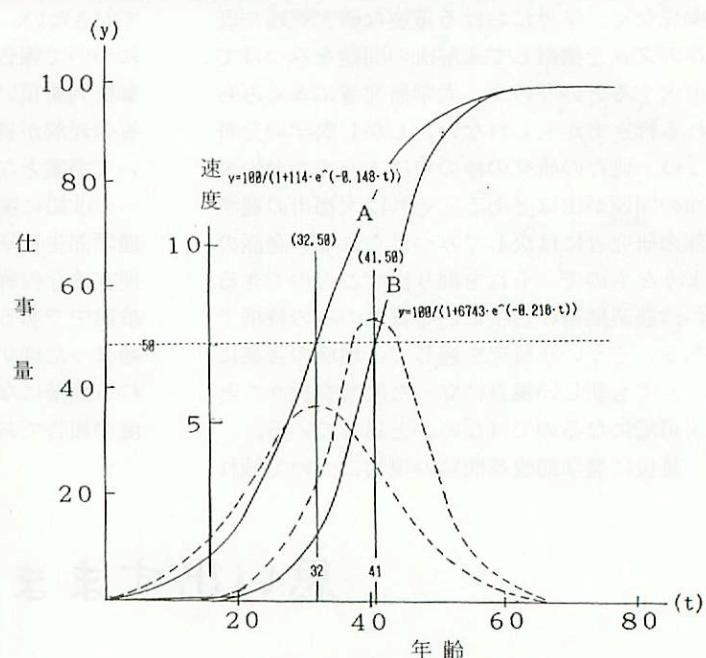


図1. 年齢と仕事量(実線)及びその速度曲線(破線)

A : 早熟型, B : 晚熟型

歳を取るともうだめだ。

いま、私の過去を振り返って、このことを作図してみた。

この図のAと、Bとのロジスティック曲線はその最終の仕事量（具体的評価は社会的地位）は同じであるが、AはBに比べて早熟型で、速度曲線が示すように32才をピークとして下降する。この人の働き盛りは32才の時で、その後も順調に世渡りしている。一方、Bは41才で、その時の下降速度はAに比べて急速で、老化が著しいこと、また、この時点までの速度=エネルギーの消費は、登りつめた地位の割にはAに比べて著しく多いこと、結局、Bは労した割には報いが少なかったことに気づくであろう。

老婆心ながら、賢く生きるために人生の早い時点で工夫が必要であると添え書きして筆を擱く。



平成7年度は生物資源科学科に1人、農業生産科学科に2人、農業システム工学科に2人の先生方が赴任されました。5人の先生方に自己紹介を兼ねて抱負などを述べて下さるようお願いしましたところ、快く御寄稿して下さいました。



長田恭一 生物資源科学科 生物資源利用学講座 助手

昨年10月に農学部生物資源科学科の生物資源工学教室に赴任した長田恭一です。出身は兵庫県姫路市で、北海道大学水産学部で修士課程を終え、一度民間企業に就職しましたが、平成3年から九州大学農学部の博士課程に進学して栄養化学と食糧化学両研究室で主としてコレステロール酸化物の脂質代謝と免疫機能に及ぼす影響に関して研究を進めてきました。現在は動脈硬化発症と血中リボタンパク質酸化の関係、そして植物ポリフェノール化合物による生体内酸化防止機能の解明に関する研究等を教室の卒研生と一緒に開始して日々努力しております。6年前に函館を離れて以来の北国での生活ですが、弘前の街は北海道とはまた違ったすばらしい自然環境の中にあり、この地で新しい研究生活をスタートさせて頂いたことに感謝して過ごしております。まだ若輩者ゆえにいろいろとご迷惑をおかけするとは思いますが、諸先生方の御指導を賜りたく思っておりますので、今後ともどうぞ宜しくお願い申し上げます。



杉山修一 農業生産科学科 園芸農学講座 助教授

1955年札幌市生まれ。北海道大学大学院博士課程を中途退学し、北海道大学農学部附属農場助手として採用され、1995年3月まで勤務しました。これまでには、イネ科牧草を対象に「倍数性や種間交雑による収量性変異の拡大」に関する育種的な研究、「群落構造と草地の生産性」に関する生産生態学的研究、「イネ科牧草の適応戦略」に関する進化適応的研究などを行ってまいりました。これからは、稲や畑作にも手を伸ばし、地域農業のいろいろな実状を勉強しながら、研究に活かしてゆきたいと考えています。また、青森県には八甲田山系、十和田湖、白神山地や岩木山など豊かな自然が多く残っております。これら自然の財産を保全するための生態学的研究などにも将来的には関わってゆきたいと考えております。どうぞよろしくお願ひ申しあげます。



宇野忠義 農業生産科学科 農業生産流通学 教授

第二次大戦の最中、1943年8月、自作農になることを夢みて克苦勉励していた小自作農家の次男として岡山県倉敷市に生まれた。ところで最近知り得たことであるが、出産時に医師が輪タクで駆けつけたそうである。当時の農村で医師が往診するのは瀕死に近い事態である。私は異常分娩でも難関の「横位」であった。これは、微用や“銃後の守り”に妊婦までも総動員させられた当時激増した異常分娩・死産の一例である。分娩当日でも農作業することが珍しくない当時、妊娠7か月の頃、連日の麦藁の鳩積み作業の振動で胎児が横転したまま出産を迎えたのである。でも九死に一生を得て誕生した。名前の由来も

大戦中に多い、天皇・国家に忠義を尽くせよ、という両親の願いが込められていた。まさに時代の申し子と言えよう。

こうした環境の中で幼少時より学卒後就職するまで家事、農作業に従事し、多くの経験をもつた。珍しいものでは畳表の原材料の蘆草の栽培、畳表織り、蓮根掘り、搾乳と初乳利用の牛乳風呂、果実収穫等。米麦野菜を含めて従事した農作業日数、場所は6道府県、数百日に達する。小学4~6年生では約3年間毎朝牛乳配達を日課としており、その習慣で12年間学校を1日も休むことなく卒業できた。云々。

こうした過去を振り返る年齢に至り、かつまたその余裕を与えられたのが、今回の弘前大学農学部への出向であった。それまで28年間、農林水産省農業総合研究所（同積雪地方支所、北海道支所で約10年）で、農業技術ことに稲作、酪農の形成・普及過程と農業経営・経済の成果と問題点、あるいは農村集落の構造分析等実態調査によって解明してきた。そして、6年前、難病で妻を失い、職場の激務と家事、二男の受験等疲労困ぱいの日々からやっと解放されたのが、95年の4月である。それ故に、初めて足を踏み入れた青森、弘前の桜、りんごは一入感銘深かった。



佐々木 長市 農業システム工学科 農業土木学講座 助教授

1958年秋田県生まれ。1981年3月岩手大学農学部卒業後、同大学大学院農学研究科修士課程修了。1983年4月宮城県農業短期大学助手、1987年4月同講師。1995年3月弘前大学に着任いたしました。農業土木学分野の農地工学を専攻。

1994年6月東京大学農学部において博士の学位を取得しました。

農地工学は、一口で言うならば良い農地を創出することを研究する分野です。21世紀は食料不足及び環境の影響が懸念されていることから考え、これまでの生産性を追求する側面の充実に加え、新しく環境に配慮した側面の付加価値が求められると思われます。このような背景を踏まえつつ、教育・研究の研鑽に励んでいきたいと考えております。

これまで、水田を中心に土壤中の降下浸透水の浸透形態が層内諸現象に及ぼす影響に関する研究を行ってまいりました。この研究により、環境と農地の関わりに関するこの一端を解明しようとしております。今後は、樹園地に関する研究もしていきたいと考えております。どうぞよろしくお願ひいたします。



泉 完 農業システム工学科 農業土木学講座 助手

1956年青森県生まれ。1978年3月弘前大学農学部卒業後、弘前大学大学院農学研究科修士課程に進学、1979年3月同修士課程を中途退学し、同年秋田県立農業短期大学助手、1988年同講師。1994年11月に着任しました。専門は農業土木分野の農業水利学。1994年3月岩手大学大学院連合農学研究科において、博士の学位（同研究科論文博士の第1号）を取得しました。現在は、水利施設の水理設計と音環境特性、省力・低コスト農法の一つである不耕起栽培による大区画水田の用水量調査などの研究に取組んでおります。今、農業農村の環境整備に関する事業が進められる中で、農業水利施設を利活用することが重要になってきています。これらのためにもさらに研究を進めて行きたいと思います。どうぞよろしくお願ひします。



卒業祝賀会

1995.3.23



農学部創設40周年を祝う 記念式典・祝賀会・講演会・記念図書・記念誌の発行



手代木学長の祝辞（記念式典）

農学部は創設40周年を迎え、10月7日に記念式典・記念講演会及び記念祝賀会が弘前大学会館・弘前大学生協食堂で行われた。

農学部は、昭和25年10月に文理学部理学科に農学4講座が開設され、昭和26年4月には文理学部農学科（専門課程のみ）となった。

昭和30年7月1日に農学部農学科として創設され、旧第8師団司令部、旧第4旅団司令部、及び弘前憲兵隊司令部の建物・敷地で教育研究が始められた。

昭和35年には農学部専攻科が設置され、その後、園芸化学科（昭和38年）、農業工学科（41年）、園芸学科（44年）が次々と設置されてきた。

平成2年に現在の3学科7大講座（生物資源科学科：生物機能開発学講座、生物資源利用学講座、農業生産科学科：園芸農学講座、生物環境管理学講座、農業生産流通学講座、農業システム工学科：農業土木学講座、生産機械学講座）に改組された。

昭和46年に大学院農学研究科修士課程の設置、平成2年には岩手大学大学院連合農学研究科博士課程に参加している。

建物も昭和41年に第1期工事が始まり、総合温室（47年）建設も含め、平成6年度に第

5期工事が竣工し、現在に至っている。

附属農場は、昭和31年4月に青森県農業総合研究所金木実験農場が農学部に移管され、金木農場と呼ばれ、60年には建物が一新された。37年4月に農林省東北農業試験場園芸部から移管された藤崎農場も、58年に建物を新築し、現在に至っている。

弘前大学会館大集会室で行われた式典には手代木涉学長をはじめ多数の来賓、菊池卓郎農学部長、農学部教職員、卒業生等約200名が参加した。

菊池学部長が、「母体のない所に農学部が設置されたのは全国的にも例がなく、青森県当局を先頭に、地域からの強い要望の結果であったことを含めて、創設から現在までの沿革」を紹介し、更に「21世紀を間近にして、新しい時代に適応した大学像が求められている。農学部が置かれている立場は、単に日本の農業だけでなく、世界の食糧問題・地球の環境問題という観点から、課せられた使命は益々大きくなっている。地域との関係を大事にしながら皆で取り組んでいきたい」という式辞が述べられた。

学長から、「農学部は3,600余名の俊才を社会に送りだし、県内は勿論のこと県外あるいは海外での卒業生諸君の活躍を耳にするとき、



中尾同窓会長より目録の贈呈（記念式典）

学長として欣喜の念にたえない」に始まり、「間近に迫る21世紀は、人類として尊厳ある生存の可能性が問われる世紀でもある。農学部が正にその真骨頂を發揮する世紀でもあり、緑濃く水青き美しい地球の保全と人類の飢餓からの脱出に関する諸問題解決への新たなる挑戦と模索への努力は、農学部に課せられた重い義務でもある」という要旨の祝辞をいただいた（全文は40周年記念誌に掲載してあります）。

青森県知事は、「わが国の農業発展向上に貢献された功績は尽大なものがあり、その指導に当たられた教職員各位を始め同窓会の皆様の御尽力に対し、深く敬意を表します」に続けて、青森県としても、21世紀への「輝く青森新時代」に向けて、積極的に農業振興に努めているところであり、その一環として、バイオテクノロジーや環境に負荷の少ない農業技術などについて、貴学部との共同研究を進めていく考えです、という意志表明がなされた（油川孝夫農林部次長代読 37年卒生）。

弘前市長は、「創設40周年を契機に、これまでの良き伝統をはぐくみながら、より一層地域に開かれた大学として飛躍されますよう念願する」と結んだ（桜庭誠蔵農林部長代読 36年卒生）。

式典の最後に、中尾良仁農学部同窓会長から菊池学部長へ「記念図書一式」（額面150万円）の目録が贈呈された。

なお、広島大学生物生産学部長三国英実氏、名久井農業高校長井畠隆夫氏からの祝電が披



工藤副知事の祝辞（祝賀会）

露された。

式典修了後、岡山大学資源生物研究所武田和義教授（前本学部助教授、学術審議会地球環境部会委員）による「21世紀を展望した農学の使命」と題する記念講演会が行われた。豊富な海外渡航経験に裏打ちされた内容を、40枚のスライドを駆使しての90分は聴衆者を充分満足させてくれた（別頁に要旨を掲載しています）。

記念祝賀会は、弘前大学生協食堂に場所を移し、三上巽氏（東地方農林事務所 43年卒生）の司会で、今哲廣副会長（青森県農業会議 43年卒生）の開会宣言で始まった。

中尾会長は、まず「40周年記念祝賀会に工藤副知事・手代木学長をはじめ多数の来賓・教職員・同窓生約250名が集い、盛大に催すことが出来たことへの感謝と敬意を表された。本事業は、30周年からの10年間を正しく記録として残すことと考えて行ったとの経過の説



記念講演 武田和義教授



祝賀会の歓談風景



りんごと地酒と同窓会員（祝賀会）

明があった。事業の中で、「記念図書一式」の贈呈、「40周年記念誌」の刊行が出来たことで、協力者への謝辞が述べられた。

最後に、「40周年の式典を契機として、更なる学部の発展と同窓会の活動の活性化を祈念する」として会長の挨拶とした。

続いて、工藤俊雄青森県副知事は、「40年間における基礎研究から応用研究までの成果と優秀な人材を輩出され、県農林部だけで現在330名いる」との感謝の辞に続いて、「農業は今国際化の影響を受けながら厳しい状況下にある。農業を全体の産業構造の中で流通・加工を含めた付加価値の高いものにし、地場産業と結びつけながら見直していくかねばならない。そのためにも本県唯一の国立大学農学部として、益々研究領域を広げ、人材を沢山送り出してほしい。また、試験研究の分野では産・官・学の連携を一層強めながら関係を深いものにしたい」との祝辞があった。望月武雄名誉教授は、農学部の草創期のことについて、「当時の津島文治知事・りんごの神様と

称された島善鄰北海道大学長のご尽力が多大であったこと、田町以信男教授が直接関与して、実験設備・器具の整備にあたったこと、教官の住宅確保のため「りんご税」が設けられたこと」等紹介された。

最後に、「農学の情報が農家に伝わっていないので、農業と農学の融合が欲しい」旨の提言がなされた。

青木二郎名誉教授の「本日ここにご参集の皆様のご健康と農学部の一層の発展を祈念いたしまして乾杯」という音頭で祝宴が賑やかに始まった。

テーブルスピーチは、佐々木信介名誉教授と相馬駿春氏（元青森県農試 28年卒生）からいただいたが、祝宴が盛り上がり過ぎて、よく聞き取れなかったのが残念であった。

歓談の輪があちこちに形成され、祝賀会は益々佳境に入り、半澤勝拓氏（福島県農試 H 6卒生）の中締めの音頭で盛会裡に幕を閉じることができた。

藤崎農場産のりんご数品種と地元の「純米酒」10数銘柄は、遠来の卒業生にとっては格別の感慨があったようです。

また、記念事業として「農学部最近10年の歩み」（弘前大学農学部創設10周年記念誌）が刊行され、参加者と拠金者に配布した。

参加された会員・拠金していただいた会員の皆様に心からお礼申し上げます。

（工藤 啓一記）

追報

なお、記念式典・記念講演会の一部始終と、祝賀会の乾杯までを、ビデオライブラリーとして、農学部教育研究協力室に保管しております。

会費納入のお願い

平成7～8年度分の会費を未納の方（振替用紙同封の方）は、7～8年度会費3,000円を納入下さるようお願い申しあげます。

なお、会費は前納制となっており、納入された方には平成8年10月発行予定の会員名簿をお送りいたします。また、住所等変更のある方は振替用紙の通信欄にご記入下さい。

支出ご多端の折から誠に恐縮に存じますが、よろしくお願ひ申しあげます。

農学部創設40周年記念事業の一つとして、講演会が行われた。講師は岡山大学資源生物科学研究所の武田和義教授である。武田先生はかつて本学の育種学教室におられた方である。記念講演の要旨は弘前大学農学部創設40周年記念誌「農学部最近10年の歩み」に掲載されている。しかし記念誌は記念式典、祝賀会の出席者に配布されただけである。素晴らしい記念講演が行われたことを会員の多くの方々に知っていただきたいと思い、武田先生にお願いし、講演要旨掲載のお許しをいただいた。

←◆農学部創設40周年記念講演要旨◆→

21世紀を展望した農学の使命

岡山大学資源生物科学研究所 教授 武田和義

弘前大学農学部創立40周年おめでとうございます。私は昭和46年から十年間、育種学教室にお世話をされた元教員ですが、このような機会にお話させていただくことを大変光栄に存じております。

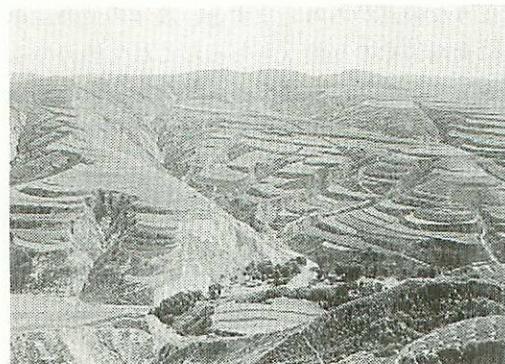
今世紀はあと数年で終わろうとしておりますが、この20世紀はどのような時代だったのでしょうか。色々な見方があるとは思いますが、今世紀は科学技術の時代だったと言つても的外れではないでしょう。応用科学の三大分野、医・工・農はそれぞれに大きな貢献をしてきました。

医学分野の進歩による具体的な成果として、この100年間に多くの国々で平均寿命はほぼ2倍に伸びています。人間が急に長命になるはずはありませんので、これは主として乳幼児の死亡率が低下したことによっています。

平均寿命が伸びるというのは結構なことです、これによって人口、特に高齢者人口が増加するという点を指摘しておかなければなりません。例えば、現在人口が約13億人の中国では、いわゆる「一人っ子政策」が取られているにもかかわらず、1年に約1,400万人の人口増加が続いている。これは一人っ子政策による出生率の低下よりも医療水準の向上による死亡率の低下が大きいためです。

今世紀、工業技術の進歩によって人類の生活が飛躍的に快適で便利になったことは誰もが認めるところでしょう。一方、この工業技術の進歩による大量生産と大量消費によって、我々は資源枯渇や環境破壊の問題に直面することになりました。

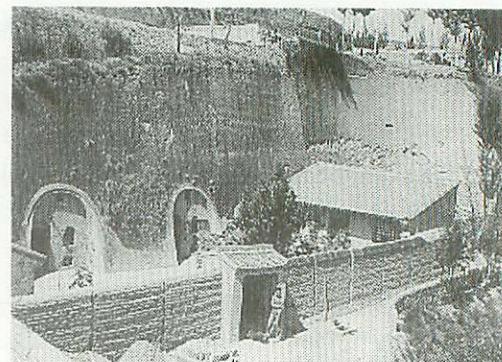
この100年間に世界の人口はほぼ3倍に増え、現在約57億人と言われています。人口が3倍に増加したということは、これを養うための食糧生産量が3倍に増加したということです（実際には摂取カロリーや動物質の栄養が増えているので、総エネルギーはもっと増えています）。今世紀に入ってから世界の農耕地はあまり増えていませんので（最近は都市化や砂漠化などによってむしろ減少してい



黄土高原の典型的な地形



ムギ刈り後の耕耘作業



ヤオトンと呼ばれる横穴式の住居

ます)、この農業生産の増加は肥料や農薬などの投入エネルギーの増加、ならびに品種改良による生産性の拡大などによっています。これは言うまでもなく農学の貢献であり、メソポタミア文明の昔から、農業は人類の繁栄と文化を支えて来た縁の下の力持ちと言って良いでしょう。世界人口白書によれば2015年の人口は71億人に達するとのことですから、引き続き食糧増産に励まなければなりません。このような経緯から、農学は「食糧生産の拡大・安定のための学問」であると言われていますが、長期的かつグローバルな観点からみた農学の使命は、端的に言って「人類の寿命を延ばすこと」ではないでしょうか。

かつて恐竜や石炭紀の動植物のほとんどが絶滅したことからもわかるように、種(species)の寿命は無限とは言えません。21世紀を論ずるキーワードが人口、資源および環境であることは多くの人々の認めるところです。このような観点から考えますと、農学の使命は単に食糧供給の基盤（もちろんこれも極めて重要ですが）だけでなく、人間活動による破壊や収奪を地球的規模における環境や資源の保全とどのようにバランスさせて行くかという所にあると言わざるを得ません。これに失敗すれば、人類は種(ホモ・サピエンス)全体として絶滅しかねないところまで来ていることは、化石燃料をはじめとする地下資源の減少、オゾン層の破壊、炭酸ガス増加に伴う温暖化とそれによる乾燥化、半乾燥地帯における過耕作や過放牧による砂漠化など、多くの事例が示しています。

ちっぽけな人間に比べて海も空もあまりに広く大きく見えるために、人類はこれに油断して空気や水を汚してきました。地球生態系が極めて脆弱で、一度壊してしまうと容易には元に戻らないということについては共通の認識が出来てきているようですが、農業も実は環境破壊の大きな元凶です。日本でも過度に集約化された農業（施設園芸や肥料・農薬の使い過ぎ）が石油資源の浪費や環境汚染の原因となっていることは良く知られています。

これとは別のタイプの環境破壊の例としてオーストラリアの農地の塩類化についてお話ししましょう。オーストラリアに入植した開拓民が放牧や農耕の邪魔になるユーカリなどの樹木を伐採したところ、それによって水の蒸散量が減少し、地下水位が上昇しました。半乾燥地では地下水位の上昇は本来歓迎すべきことだったのですが、地質的に地下に岩塩層を持つ地域では塩分を含む地下水位が上昇することによって地表に塩類が集積し、現在、場所によっては年々5%の割合で農地が失われているとのことです。

もう一つの事例は中国の黄土高原にあります。黄土高原は約54万平方キロの広さを持ち、数百万年にわたって中央アジアから風で運ばれてきた黄土が数十～数百メートルも堆積しています。本来は肥沃な土地ですが、数千年

にわたる人口圧（森林の伐採、過放牧と過耕作）によって植生が完全に破壊されたため土壤と水の流出が激しく、今では中国の極貧地帯となっています。中国の古代文明がこの黄河中流域に起こったことを考えると、人間活動が環境破壊の元凶であることが良くわかります（地中海周辺の古代文明の栄えた地域の砂漠化も過度の人間活動によると見られています）。

一方、ヨーロッパからの移民が入植してわずか200年にしかならない合衆国中西部のグレートプレーンでも激しい土壤侵食が始まっています。この地域が中国黄土高原の二の舞になると世界の農業生産は大打撃を受けるだろうとみられています。

土木工学的な手法による治山・治水の限界が認識されて植生による環境修復・保全の重要性が注目されており、また、生物機能（光合成や窒素固定などのマイルドな生物反応）を利用した循環型の物質生産の重要性が見直されています。本年4月、学術審議会が答申した「地球環境科学の推進」に関する建議にも生物の機能を利用して地球生態系の sustainability（持続性）を回復するという視点が述べられており、これはまさしく21世紀の農学の守備

範囲です。例えば、岡山大学工学部では生物応用工学科（入学定員45名）と生体機能応用工学科（同40名）が設置され、工学的なアプローチによる新たな生物学の分野が展開しつつあることは注目されます。

農林水産業の基本は、葉緑体という一種の太陽電池によって無限と言ってよい太陽の光エネルギーを固定するプロセスであり、これは無公害・持続型産業の典型と言ってよいでしょう。将来、核融合技術が完成しない限り、人類にとって無限のエネルギー源は太陽しか無く、そのエネルギーを大規模、低成本で固定する方法は光合成しか無いと言うことを私達は再認識すべきです。

このように、今や、農学は食糧増産云々という狭い分野の学問では無く、人類全体の存亡を担う学問であるという観点に立たなければならぬということについてはご賛同いただけると思いますが、更にこのかけがえの無い宇宙船「地球号」を次の世代に渡して行く上で、近年ますます重要性を増しつつある地球環境科学の生物側からの担い手として21世紀の新たな農学が展開していくものと信じております。

支部だより

西北五支部総会開催

平成7年2月23日、五所川原市「蝶屋」で西北五支部総会が開催されました。学部からは齊藤寛が出席しました。

斎藤貞昭支部長の挨拶に続いて、齊藤が学部の現況について説明し、農学部創設40周年記念事業への協力および平成7～8年度同窓会総会の開催を西北五支部で引き受けてくだ

さるよう要請しました。その後、懇親会に移り、近況報告し合い、酒を酌み交わすほどに宴は盛り上がり、盛会裡に総会を終了しました。西北五支部の皆様ありがとうございました。石田雄一幹事（生化48年卒）、ご苦労様でした。

（齊藤 記）

第15回 福島支部「わんどの会」に参加して

平成7年3月4日、会津盆地の西側に位置する新鶴村の「ほっとぴあ新鶴」で第15回福島支部「わんどの会」の総会が開催されました。境 隆（昆中39年卒）支部長はじめ20名以上の参加者があり、隣県の栃木県から2名の参加者がありました。平成以後に卒業した若い人が多かったという印象でした。学部からは福重裕康先生と齊藤寛が出席しました。福重先生は用意した資料をもとに「作物生産のシステム化とその応用」について話されました。また、齊藤は学部の現況について説明

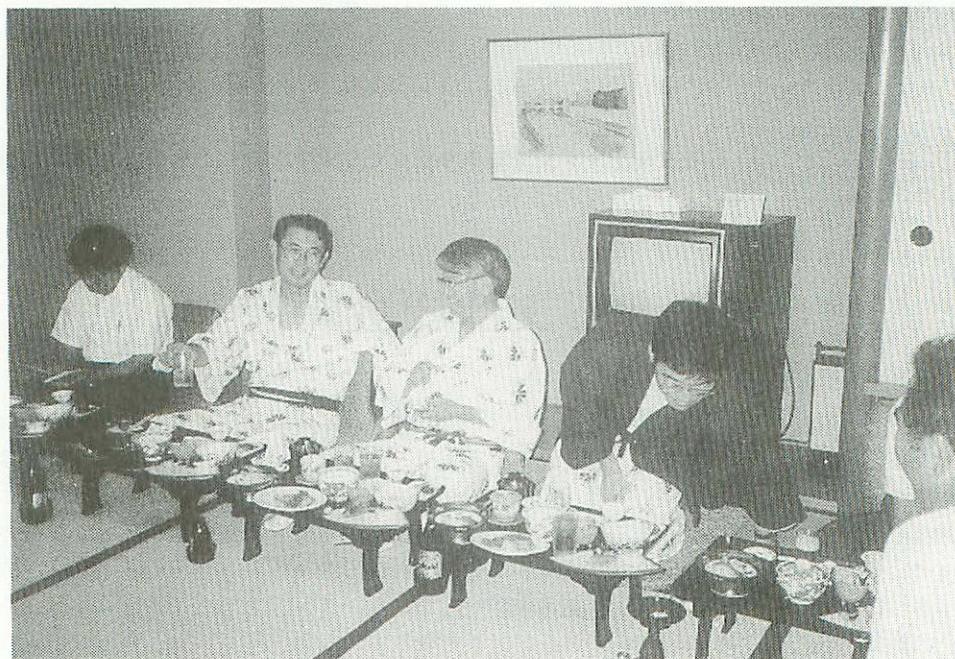
し、農学部創設40周年記念事業への協力をお願いしました。その後、懇親会に移り、自己紹介や近況報告などで盛り上がり、宴は尽き難かったです。翌朝、再会を約して別れました。私たちは会津若松市内を案内していただき、福島駅より帰路につきました。境支部長はじめ福島支部の方々、および福島から新鶴村まで送迎していただき、会津若松市内を案内していただいた飯塚博栄氏（作物54年卒）に心から御礼申し上げます。

（齊藤 記）

岩手県支部同窓会の「集い」に参加して

8月25日（金）花巻温泉「ホテル千秋閣」で岩手県支部同窓会の「集い」が開かれました。農学部からは塩崎雄之輔と川越信清が参加しました。集いの案内には「支部結成の集い」と

なつていて、未だ支部結成がなされていないのかと不審に思い、参加前に同窓会名簿で調べますと岩手県支部の名称が掲載されていて、何かの間違いと思いながら「集い」に参加し



出席者が少なくとも大いに盛り上りました

ました。今回の集いを企画した幹事の手違いと支部同窓会としての運営事務の不十分さからこのような事態が生じたことを知りました。

「集い」には岩手県支部の同窓会員が9人出席で、支部会員数が約260名の割には出席者の少なかったのは残念でした。しかし出席できなかつた方々からの葉書には、岩手県支部同窓会の活躍を期待している意見が多くあり、支部運営を軌道にのせることができれば同窓会活動が活発に行われる確信しました。

「集い」は今回の「集い」開催の趣旨説明から始まり、自己紹介と進み、他の支部に負けない活動を今後展開することなどについても話し合われ、意氣の上がる内容でした。大学から参加した私達は農学部で進められている改革の経過と連合大学院を含めた学部の状況、

40周年記念事業の内容について報告を行いました。引き続き懇親会に入り、出席者の少ない利点を十分に活かし、今後の支部活動のあり方や学生時代の昔話などに全員が共通の話題で加わり、お互いに懇親を深めることができました。また別の部屋での二次会も全員で、さらにホテルの外へと全員で繰り出すほどまとまりある盛り上がった「集い」がありました。

私ごとになりますが、翌26日(土)には梁川さん(農工:45年卒)の案内で花巻農業高校、宮沢賢治の記念館など訪れ、宮沢賢治の勉強をして来ました。

これから岩手県支部同窓会の益々の活躍を期待しています。皆様どうも有難うございました。
(川越信清 記)

岩手県支部同窓会

阿 部 弥 之

11人の男の人たちが写った記念写真を前にして、この夏、8月25日のことを想い出しています。

最前列に並んだ、弘前からおいでになった土木の川越先生と農場にいる塩崎先生との表情からは、はつきりと落胆の色さえ見てとれるのだ。弘大農学部40周年記念を前に、「岩手県支部」を結成するための同窓会を持ちます。是非とも、同窓会事務局から2名の先生の出席を願いますと要請したものとして申し訳ない気分になります。

写真の前列左角に座った梁川(旧姓藤原)清美と後列右角に立つ私、阿部弥之の二人が呼びかけ人となって開いた会合に、7人が参加するだけの予想を遙かに下回ったものとなったからです。

同窓生は80名から、多くても100名ぐらいしか県内に在住しないだろうから、事務量といつても容易であろうと予想していました。ところが、本部からの名簿で270名も居るこ

とがわかり、宿泊予約も、最大で50名ぐらいと訂正するなど、郵送などの事務量や費用など大巾に増加せざるを得ませんでした。

結果として呼びかけた文書数は260通、住所が変更され、私に戻された手紙は17通でした。250名に届けられ、約90名の仲間たちから返信が寄せられています。当日、出席してくれたのは、予約してくれた6名と飛入りの1名で、記念写真には11名が納っているという訳です。

参加していただいた方々と、こうした会合の意義を認めながらも、都合があつて欠席せざるを得なかつた方々に感謝を申し上げると共に、弘大農学部同窓会「岩手県支部」に対する私どもの考え方と皆さんから寄せられた意見を整理して報告します。

まず、岩手県支部の結成には、一人を除いては賛同しています。大多数の会員からは熱烈歓迎という意の葉書が寄せられています。

何がなんでも、この冬の間に実現させたいと準備しています。



岩手県支部同窓会出席者

前列左から、梁川清美（農工45年、花巻農業高校）、塩崎先生、川越先生、お名前忘れました（申し訳ありません）、折居周二（利用53年、和賀中央農協）。

後列左から、永井英三（農地51年、石鳥谷町役場）、工藤正寿（植病55年、二戸市役所）、鈴木繁實（植病44年、県養蚕試験場）、河口勇人（農機60年、安比総合開発）、瀬川和年（土肥49年、遠野保健所）、阿部弥之（果樹44年、花巻農業高校）

平成 7 ~ 8 年度農学部同窓会総会報告

平成7～8年度の総会が、農学部創設40周年記念式典当日の10月7日、10時30分より弘前大学会館3階大集会室で開催された。参加者は多くなかったが、約1時間にわたって熱心な討議がなされ、以下のことが決定された。

弘前大学農学部同窓会平成5～6年度事業報告

平成5年6月15日	上十三支部会 工藤幹事 出席	平成5年10月20日	会報14号発行
7月31日	同窓会総会	11月12日	福島支部会(わんどの会)
8月20日	母校援助費として20万円 寄贈	11月27日	篠辺、斎藤健一両教官出席 関東支部総会 篠辺、中 村両教官出席
9月27日	役員会(環境学部構想説 明会) 貴森市八甲荘	平成6年2月18日	西北支部総会 村山、工 藤明両教官出席

3月23日	卒業・同窓会入会祝賀会	平成7年3月23日	卒業・同窓会入会祝賀会
7月1日	母校援助費として20万円 寄贈	3月30日	同窓会名簿発行
8月20日	会報15号発行	6月17日	第2回40周年記念事業実行委員会
12月13日	役員会（農学部40周年記念事業について）	7月4日	母校援助費として20万円寄贈
平成7年2月2日	農学部創設40周年記念事業実行委員会	8月25日	役員会
2月23日	五所川原支部会 斎藤幹事出席		岩手支部会 川越教官、塩崎幹事出席
3月4日	福島支部会(わんどの会) 福重教官、斎藤幹事出席	9月4日	第3回40周年記念事業実行委員会

平成5－6年度決算

収 入

項 目	予 算	決 算	達成率	摘	要
繰越金	1,463,987	1,463,987	100		
正会員	3,900,000	3,906,000	100	1,302名 (3,000円)	
入会費	1,500,000	2,298,000	153	280名 (6年度から10,000円)	
広告料	180,000	155,000	86	15件 (26万のうち9件分)	
利 息	100,000	28,974	29	定額貯金	
合 計	7,143,987	7,851,961	110		

支 出

項 目	予 算	決 算	達成率	摘	要
名簿発行費	2,000,000	2,223,324	111	平成6年度版、送料・名簿管理費含む	
会報発行費	1,000,000	1,145,640	115	会報14号、15号、送料含む	
歓迎会費	800,000	697,914	87	卒業祝賀会、懇親会、記念写真、送料含む	
支部後援費	800,000	505,592	63	支部総会支援、出席教官旅費	
母校援助費	400,000	400,000	100	環境整備費を主体として	
会議費	600,000	404,430	67	総会、役員会、出席旅費を含む	
庶務・管理費	500,000	119,029	24	事務、アルバイト代	
通信・印刷費	500,000	319,264	64	総会案内、葉書・切手代等	
慶弔費	70,000	33,802	48		
振替手数料	100,000	92,120	92	会費、入会費、広告料	
予備費	373,987	1,910,846	511		
合 計	7,143,987	7,851,961	110		

平成7－8年度事業計画

平成7年10月7日 総会 弘前大学
 創設40周年記念祝賀会
 　・年1回会報発行
 　・母校援助費寄贈
 　・卒業・同窓会入会祝賀会

- ・支部会への教官派遣
- ・役員会の開催
- ・総会の開催(五所川原支部担当)
- ・同窓会名簿の発行
- ・その他必要と認められる事業

平成7-8年度予算

収入

項目	5-6年度予算	7-8年度予算	前年比	摘要	要
繰越金	1,463,987	1,910,846	130		
正会員	3,900,000	4,200,000	108	1,400名	
入会費	1,500,000	2,000,000	133	200名	
広告料	180,000	250,000	138		
利 息	100,000	50,000	50		
合 計	7,143,987	8,410,846	118		

支出

項目	5-6年度予算	7-8年度予算	前年比	摘要	要
名簿発行費	2,000,000	2,500,000	125	平成8年度版、送料・名簿管理費含む	
会報発行費	1,000,000	1,300,000	130	会報16号、17号、送料含む	
歓迎会費	800,000	800,000	100	卒業祝賀会、懇親会、記念写真、送料含む	
支部後援費	800,000	800,000	100	支部総会支援、出席教官旅費	
母校援助費	400,000	400,000	100	環境整備費を主体として	
会議費	600,000	500,000	83	総会、役員会、出席旅費を含む	
庶務・管理費	500,000	200,000	40	事務、アルバイト代	
通信・印刷費	500,000	500,000	100	総会案内、葉書・切手代等	
慶弔費用	70,000	50,000	71		
振替手数料	100,000	100,000	100	1,600名分	
予備費	373,987	1,260,846*	337		
合 計	7,143,987	8,410,846	118		

*予備費の一部は40周年記念事業の補充に使う事を総会で了承された。

弘前大学農学部創設40周年記念事業決算報告

農学部創設40周年記念事業は別稿のごとく無事終了いたしました。ご協力いただいた会員各位に厚く御礼申し上げます。以下に収支決算を報告します。

特別会計収支決算

収入総額	4,168,000
支出総額	4,168,000
収支差引残高	0

収入の部

醸 金	3,040,000	608名分
祝賀会々費	1,000,000	200名分(同窓生152名、教職員43名)
祝賀会祝儀	128,000	
	4,168,000	

支出の部

記念祝賀会関係経費*	1,346,093
記念誌発行経費	1,136,895
会議費	130,368
印刷通信費	472,938
アルバイト謝金	31,043
振替手数料	34,510
記念図書経費**	1,016,153
	4,168,000

* 記念講演会の経費を含む。なお、記念式典の経費は農学部で負担しました。
 ** 記念図書経費として学部には1,500,000円を寄贈することとし、不足分は同窓会予算の予備費から支出することにしました。ご了承ください。なお、この措置については総会で了承を得ております。